ジョイサポコラム　No.26

視覚リハビリテーションの取り組み

いけがみ眼科整形外科　澤崎　弘美

整形外科（夫）と眼科（私）の二科で横須賀市池上に落下傘開業し、気がつけば20年以上が経ちました。

眼科の診療を続けていると、進行性の病気でしだいに目が見えにくくなり残念ながら失明に至る患者さんも少なからずいらっしゃいます。勤務医の頃よりも深く患者さんの日常生活に関わるようになるとどうしても気になることがありました。

きっかけとなった男性がいます。もともとフルマラソンを完走するほどの体力の持ち主でした。目の見えにくさから外を歩くことが困難となり、家族からも外出を禁じられて家に引きこもった結果、気づいた時には椅子から立ち上がることも難儀なくらい足腰が衰えてしまったというのです。ほかにも、マスターズ水泳で記録を持っていたという70代女性が、失明のため単身生活が困難となり高齢者施設に入所して心も身体もみるみる弱ってしまったということもありました。目が見えにくいことが原因で本来元気な人の健康が損なわれるとなると、これは眼科医以前に医者として何とかしなくてはならないと考えるようになりました。

なぜそのようなことが起こるのか。病気やけがで障害を負ったとき、医療の中でリハビリテーションが始まり日常生活の改善や社会復帰への道につなげるものですが、日本の眼科医療には視覚リハビリテーション（以下視覚リハ）が組み込まれておらず、それを担当する医療職も存在しません。そのため多くの視覚障害者は日常生活機能が大きく損なわれたまま放置され、健康被害（二次障害）を被ることになります。特に高齢の人ほどその傾向があります。一方、治療中から必要な時期に適切な視覚リハにつなげることができれば、たとえ目が見えなくなっても高齢であっても自立した豊かな人生を取り戻すことは可能です。

そこで、当院では目の見えない見えにくい患者さんが健康で幸せな日常生活を取り戻すためのロービジョンクリニック（視覚リハ外来）を開設しています。視覚補助具の処方、補装具や日常生活用具の選定、生活環境改善の助言を行うほか、行政や訓練施設や各種団体と密に連携をとって歩行訓練士などの視覚リハ専門家につなげます。

クリニックの外でも、視覚障害者の外出機

会・運動機会を作るさまざまな活動に取り組んでいます。中でも私自身が一番楽しんでいるのが、視覚障害者と晴眼者が伴走ロープでつながって一緒に歩いたり走ったりするイベントです。視覚障害のある方は口々に「再び風を切って颯爽と歩けるとは夢にも思わなかった」とおっしゃいます。絶望の淵で「死にたい」とつぶやいていた人が生き生きと走り出す姿を見ると、本当にうれしい気持ちになります。

横須賀市の視覚障害者手帳所持者数は900人弱。実際は視覚障害に該当する人は手帳所持者の5倍ほどいると言われています。どの医療機関にも目の不自由な患者さんはいらっしゃるはずです。生活上困っていることはないか、家に引きこもっていないか、目が見えないことで健康被害が出ていないか、ほんの少しでも気にかけていただけたら幸いです。